

風姿花伝第四、神儀云 仏在所には

一、仏在所には、須達長者、  
祇園正舎をたて、供養の  
時、釈迦如来御説法ありし  
に、提婆一人の外道を伴  
い、木の枝篠の葉に幣を附  
て、踊り喚めば、御供養宣  
べ難かりしに、仏、舍利弗

〔口訳〕 天竺に於ては、須達長者が、祇園  
精舎を建立して、仏を供養し奉つた  
時、釈尊が御説法をせられたが、その  
時提婆が一人の外道を引きつれ、木  
の枝や篠の葉に幣を附けた物を持ち、  
大声で歌ひ踊つたので、釈尊は御説法  
遊ばし難かつた。その時、釈尊が舍利  
弗に目くばせなされると、舍利弗は直  
に仏力を感じ、御後戸に於て、鼓や  
鉦の樂器を揃へ、阿難の才覚、舍利弗  
の智慧、富楼那の弁舌を以て、六十六  
番の物真似をせられたところ、外道共  
は、笛や鼓の音を聞いて後戸の方に集

に御目<sup>おんめ</sup>を加へ給へば、仏力<sup>ぶつりき</sup>

を受け、御後戸<sup>おなんど</sup>にて、鼓、

鉦鼓<sup>しやうこ</sup>を調へ、阿難<sup>あなん</sup>の才覚、

舍利弗の智恵、富楼那<sup>ふるな</sup>の弁

説にて、六十六番の物真似<sup>まね</sup>

をし給へば、外道、笛鼓の

音を聞きて、後戸<sup>なんど</sup>に聚まり、

つて来、その物真似を見物して騒ぎが止んだ。その間に、釈尊は御説法を遊ばした。かうした事から、天竺に於て、此の猿樂の道が始まつたのである。

是を見て静まりぬ。其隙<sup>ひま</sup>に

如来供養を宣給<sup>のべ</sup>へり。それ

より天竺に此道<sup>しどう</sup>は初る也。